俳句

大津俳句会

堆く日をかさねたる落椿　井芹眞一郎

子雀に空広々とありにけり　秋山　恵子

裏庭のどこかが動き日脚伸ぶ　市原　初女

春寒や姉とも慕ふいとこ逝き　江藤　みち

お隣の自慢の庭の花ミモザ　大塚喜久子

白梅や久しくなりし祖母忌日　坂本　セキ

物の芽に明るくなってきたる庭　佐賀　久子

拙くもしかと鳴きたる初音かな　松尾　昭雅

菜の花の一面匂ひ立ちにけり　渡邊佳代子

雫ほどいただく下戸の桃の酒　岡崎　浩子

雪柳今にも羽搏きそうな風　森山美穂子

俳句

つのはな句会

炒飯（チャーハン）の味して父の涅槃（ねはん）西風（にし）　星永　文夫

寒林棒立ちコロナ菌未だ消えず　田上　公代

地図帳の村々消して月おぼろ　木庭　杏子

伴天連の祈り広がる春の闇　上杉　波

信号は点滅春の魔物呼ぶ　矢嶋　道子

国挙げてコロナ菌にかける弥生　水野　春子

なごり雪苦しみまでも消してゆく　梅木トキエ

冴返る郵便受けの閉まる音　塚本　洋子

春雨をひきずって行く救急車　榮田しのぶ

とげとげしい日常包む春の雪　志賀　孝子

短歌

大津短歌会

不自然が自然の姿と声も出ず
長く住み来し家流れゆく　管野　静

肩くみて白川べりを散歩する
孫は未来を吾は過ぎし日を　渡邊佐代子

朝日受け霜解け初めし桜草の
姿勢を正す仕草愛しき　豊岡ミツル

矢護川の川面に映る空の碧（あお）
葦の枯れ葉は風に揺れおり　鞍　岳志

狂い咲く桜の幹に頬寄せて
桜の鼓動聞いていたりき　吉永　恵子

地平線水平線とあるなれど
振り仰ぐ空深くはてなし　坂本　果子

授かりし天使の如き幼子を
手離す鬼心ためらいありや　小平　善行